“Kitāb-i Baḥrīya” の性格

——Ayasofya2612 寫本本文を中心に——

新谷英治

はじめに
Ⅰ Ayasofya2612 寫本
Ⅱ Ayasofya2612 寫本本文の構成上の問題
Ⅲ Ayasofya2612 寫本本文の內容上の問題
おわりに

はじめに

オスマン朝と地中海の關わりはどのようなものであったろうか。

元來、トルコ人たちは陸上における遊牧を業とし、水上での活動にはなじみが薄かったと思われる。一一世紀にアナトリアへの流入を本格的に開始したオグズ系のトルコ人たちもまた例外ではなかったであろう。それにも拘らず、彼らの後裔がアナトリアにおいて興したオスマン朝は、一五—一六世紀の閒を通じて、地中海、黑海あるいは紅海を制覇する海上勢力となった。このことはオスマン朝史に特色を與える大きな要素であり、歷史上の他のトルコ系諸民族、諸國家の歷史をも視野に入れた場合、オスマン朝の際だって特徵的な事象として浮び上がってくる。

このようなオスマン朝の海上、なかんずく地中海での隆勢が如何にして可能になり、またオスマン朝の地中海との關わり方の實體は如何なるものであったのか。政治的、軍事的にはもちろんのこと、經濟的、文化的な側面においても、オスマン朝にとって地中海は如何なる意義を有したものであったか。こういった點は大變に興味深く、また重要な問題と言えよう。(1)

それでは一五―一六世紀のオスマン朝の地中海との關わり方は如何にして檢討可能となるか。まず我々は、オスマン朝が地中海に關してどのような知識を有していたのか、卽ち、オスマン朝が地中海を如何なるものとして理解していたのかを正しく知る必要がある。それは、オスマン朝と地中海の日常的な關わりの樣相を明らかにしてゆくことに通じる。そのような意味で研究の出發點とされるべき文獻は、一六世紀初頭にオスマン朝の海軍指揮官の一人 Pīrī Ra'īs によってオスマン・トルコ語で著わされた "Kitāb-i Baḥriya"(『海洋の書』)であろう。

ピーリー・ライース及び『キターブ・バフリエ』については、三橋冨治男氏によってすでに我が國でも紹介されている(2)がここで簡單に整理しておく。

ピーリー・ライース(?―一五五四/五)はオスマン朝海軍指揮者の一人として有名な Kamāl Ra'īs(?―一五一一)の甥であり(3)、血筋はトルコ系、ギリシャ系のいずれとも言われるが、定かではない。生年は正確には知られていないが、一四六五年ないし七〇年頃にガリポリで生まれたと考えられている(4)。實の名は Aḥmad b. 'Alī al-Ḥājj Muḥammad Qaramānī Lārandawī であったとされる。幼小からおじカマール・ライースの許で船上の生活を送っていたらしい。

一四九五年の弟ジェムの死により對外政策を積極化したバヤズィット二世の求めに應じてカマール・ライースがオスマン朝海軍に歸屬した時、ピーリー・ライースもおじと行動をともにし、この頃から本格的にオスマン朝海軍と關わりを持つようになった。ピーリー・ライースの名前がオスマン朝の海軍史に登場するのは一四九九―一五〇二年の對ヴェネツィア戰爭が最初である。この時、ライース(ra'īs 一般に船長の意)として何隻かの戰艦を率いた。カマール・ライースの死

後、一五一六―一七年には對エジプト遠征に參加した。以後、Preveza の海戰での勝利で知られる Khiḍr Ra'īs (Khayr al-Dīn Barbarossa, ?―一五四六) の許でその名を知られることになるが、やがてエジプト方面の艦隊責任者となり、スエズからアラビア海、ペルシャ灣にまで乘り出してポルトガル勢力を牽制した。一五五一年當時ポルトガルが占領していたホルムズを包圍したが、敵から賄賂を受け取って敢えてホルムズを攻め落とさずに撤退したとの嫌疑がかかり、(5) これが原因となってスルターンの不興を買い、一五五四／五年（ヒジュラ暦九六二）處刑され、財産も沒收された。沒年が正しいとすれば、八〇ないし九〇歳で現役の艦隊長であったことになる。これを不自然とするならば、生年はもっと繰り下げられるべきかも知れない。〔Kurdoğlu-Alpagot 1935: I―XVI; Afet İnan 1974: 8―17 他〕

『キターブ・バフリエ』は、いわば地理的情報や航海方法を主體にした地中海航海案內とも言うべきものであり、成立の事情は『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612 寫本（後述）の序文によれば、大略次の通りである。

海洋の知識 daryā 'ilmi と船乘の技術 mallāḥlar ṣan'atī についてまとめ、スルターン〔・スレイマーン一世〕に獻上するために書いた。カマール・ライースその他とともに地中海の海岸、島々の海岸の人の住む所 ma'mūrlar、廢墟となった所、港、川、岩礁、淺瀨などについてしっかりと見てきたが、地圖では距離が縮小されてしまうためにそれぞれの地點の細かな情報を示せない。そのため文章で說明を加える必要がある。本書はヒジュラ暦九三二〔西暦一五二六〕年にガリポリで書き上げられた。以前から下書は作成してあったが、スルターンに獻上するのは困難なことだ (amr-i 'asīr) と考え、淸書をしないままであった (bayāza chiqarīlmīyup qalmishdi)。(6) しかし〔大宰相〕イブラヒーム・パシャの命を受けて、すっかり淸書を終えた。〔Ayasofya: 3―7〕

著わされた理由は、著者の述べる所によれば、自分が實際に知り得た地中海の姿と航海技術についてまとめ、實際の用に供することであった。しかし、それにとどまらず歷史的な情報も記述されており、樣々の角度から硏究されるべき內容を含んでいる。

さて、このように『キターブ・バフリエ』は水夫あるいは水兵のための航海上必要かつ有益な實踐的・實用的情報を提供する事を第一義的な目的とし、實態上歴史的事實よりはむしろ地理的情報の記述に重きが置かれた著作であり、その意味では地理書の範疇に屬する書物であるが、執筆された一六世紀初頭のオスマン朝における地中海に關する知識・理解が集約されたものと言える。そしてオスマン朝側で書かれたそのような著作は今日知られている限り、他に存在しない。その意味で、オスマン朝と地中海の關わりを考える場合、我々はまず地中海に關する基礎的な情報を提供し、類書をもたないこの著作を分析し、オスマン朝の地中海に關する知識と理解、認識の實際を檢討することから始めねばならないと言えよう。

『キターブ・バフリエ』は、後述の通り、ヒジュラ暦九二七年に完成したもの（以下九二七年本と呼ぶ）と同じく九三二年に完成したもの（同じく九三二年本と呼ぶ）の二種の系統を持つ。それぞれの系統の寫本に基づいて、一部或いは全體の翻譯、序文あるいは本文の一部を紹介、檢討する作業は既に一八世紀以來先學の手によってなされている（別掲參考文獻表參照）。しかし、かつて Soucek が指摘した通り〔Soucek 1973b: 241〕、地中海の各地を説明している本文全體を總體として分析する作業は未だに行なわれておらず、現在も依然その狀態は改善されていないと言わねばならない。

本稿は、『キターブ・バフリエ』九三二年本の一寫本の本文全體の整理と分析を行ない、本文の構成上の問題及び內容上の問題を檢討することによって『キターブ・バフリエ』の本文の性格を明らかにすることを目的とする。これはオスマン朝と地中海の關わりを考えていくためのごく基礎的な作業の一部である。

I　Ayasofya2612 寫本

1　『キターブ・バフリエ』の種々の寫本

『キターブ・バフリエ』はヒジュラ暦九二七年に完成したもの（九二七年本）と同じく九三二年に完成したもの（九三二

年本）の二種の系統を持つ。九二七年本の寫本が單に二系統に分かれて流布したのではなく、九三二年に著者自身によって改めて書き上げられたものが九二七年本とは別個に流布していったのである。[7][8]

今日いずれの系統についても、複數の寫本を比較検討した校訂本はない。Paul Kahle による九二七年本の一寫本のテクストとドイツ語譯の出版は未完のままである。從って實態として我々は各圖書館等に所藏されている寫本の形で利用できるのみである。なお、著者自身の直筆本は兩系統ともに所在が確かめられていない。[9]

Kurdoğlu-Alpagot 1935, Afet İnan 1974 によれば、九二七年本一六寫本、九三二年本一三寫本、計二九寫本、また Soucek 1973 によれば、九二七年本二二寫本、九三二本一〇寫本、地圖のみのもの二、計三四寫本が知られている。

報告者によって相違が生じているため、[10] 實際に確認する作業を急がねばならないが、ともあれ現在報告されているかぎりにおいて、Soucek が指摘する地圖のみのものを別にして本文の附されている寫本だけを考慮すると、九二七年本はヨーロッパ各地及びトルコで所藏され、一方九三二年本はフランスの Bibliothèque nationale 所藏の一寫本（Supplément turc 956）を除いて全てイスタンブルに所在する。[11]

以下の議論は、本來であれば現在知られている寫本すべてを比較・検討し、それぞれの系統についてテクストを確定したうえで進められるべきものである。しかし、それらの作業はやや時間を要すると思われ、また唯一全體がファクシミリ版で出版されて最も利用しやすい形で提供されている、九三二年本に屬する Ayasofya2612 寫本（イスタンブルの Süleymaniye 圖書館所藏）すらその全體の分析と考察は充分に行なわれていないのが現狀である。それゆえここでは考察の對象をこの Ayasofya2612 寫本に絞り、特に本文の敍述の展開、内容の問題を検討していきたい。

2　Ayasofya2612 寫本

以下で検討の對象とするイスタンブルの Süleymaniye 圖書館所藏 Ayasofya2612 寫本は、前述の通り『キターブ・バ

フリエ』の諸寫本のうち、現在全體がファクシミリ版で出版されている唯一の寫本である。[12] 奥書（colophon）を持たないため、書寫生、書寫年代は不明である。書寫年代についてSoucekは、一六世紀後半から一七世紀前半に成立したと考えられる他の九三二年本系の寫本と比較して、Ayasofya2612寫本本文に附された地圖が粗雑であることを根據に、Ayasofya2612寫本が最も早い時期の寫本に屬し、原本に極めて近いものの一つと考えている。[13] 文字は明瞭なナスフ體であり、母音點が施されている。母音點は文字と墨の濃さが違うため、時を違えて施されたか、あるいは書寫生とは別の手になるものと考えられる。

Ayasofya2612寫本の構成と内容の概略は次の通りである。なお以下のページ數はファクシミリ版に記入されたものによっている。寫本自體には本來記されていない。

序文（二―七ページ）は散文で書かれ、スルターンへの獻辭、執筆動機その他を述べる。解説部（七―八五ページ）は韻文であり、著者の知るところの航海法や、地理的、歴史的な情報を總論的に述べる。本文（八六―八四八ページ）は、地中海を二一〇の地域に分割し、[14] それぞれに一章を充てて沿岸地域及び島嶼に所在する港、岬、町などの地形、航海上の注意點などを細かに述べる。各章毎にその末尾に關係地域の地圖が附される（總數二一五圖）。跋文（八四九―八五五ページ）は序文と同様に韻文であり、執筆の動機から完成までの事情を簡單に述べて本書を締めくくる。この跋文の後（八五六―八五八ページ）に、先の二一五圖の地圖とは別にマルマラ海關係の地圖三葉が附けられている。これには説明文は無く、地圖のみである。著者自身が本文で、

> 最初は〔ダーダネルス〕海峡のヒサール〔Sulṭānīya（現Çanakkale）及びその對岸のKalīd al-Baḥr（Kilitbahir）〕から出發したのであり、〔地中海の全域を説明した後〕またその兩城（qal'alar）で終了すべきである……。〔Ayasofya: 277〕

と述べている點に鑑みて、これらのマルマラ海關係の地圖は後に附された可能性が高い。

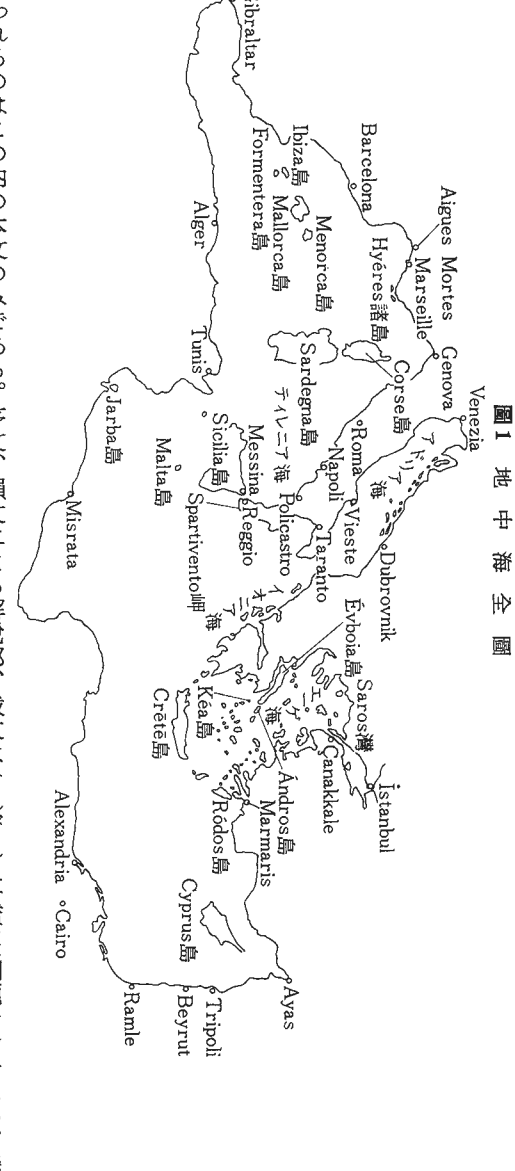


圖1　地中海全圖

以下で扱われるのはこの内の本文のみである。序文、韻文による解説部、跋文はそれぞれに重要な問題を含むため、機會を改めて考察の對象としたい。

Ⅱ　Ayasofya2612 寫本本文の構成上の問題

1　本文の敍述の流れ

既に述べた通り、本文は全體で七六三ページある。二一〇章からなり、原則的に各章末に關係の地圖が附され、地圖は二一五圖を數える。

まず敍述の流れ、卽ち各地域がどのような順で説明されているかを確認する。敍述はダーダネルス海峽のエーゲ海への出口に近いスルターニーヤ及びキリトバヒルに始まり、エーゲ海に面したアナトリア、ギリシャの海岸部、及びエウボイア Évboia (Negroponte) 島を説明する。次いでキクラデス諸島西部・西スポラデス諸島を除くエーゲ海の島々を説明した後、アテネの近邊から西に向って地中海の海岸部とその近邊の島々を順に解説する。ジブラルタル海峽から北アフリカに移り、エジプト、シリアを經てアナトリア南岸部を述べた後、エーゲ海の殘りの島々を説明して、最後のサロス Saros 灣に至る。エーゲ海と地中海を圍む海岸部とその中の島々のうち、主要なものは殆ど網羅されていると言って良かろう。説明される地區の移動方向は概ね規則性を有しており、また、各章での港、岬、町等の説明順は原則的に地區の移動方向と同一になっている。このように『キターブ・バフリエ』の本文の敍述形態には規則性が存在すると言って良い。

しかし明らかに規則性を破っている部分が存在する。それはエーゲ海の海岸部とその島々に關わる部分、及びイタリアの西岸部からジブラルタル海峽に至る海岸部である。

(1) エーゲ海域

この部分の説明は、先ず最北部の島々、卽ちボズジャアダ Bozca Ada、イムロズ İmroz Adasi、サモトゥラケ Samothrákē (Semadirek)、レムノス Lḗmnos (Limni)、ハギオス・エウストゥラティオス Hágios Evstrátios (Bozbaba)、タソス Thásos の各島、次いでその對岸のギリシャの海岸部を説明した後エウボイア島に移り、その後はアナトリア海岸に近いレスボス Lésbos (Midilli) 島に飛ぶ。そこから南東方向にアナトリアのエーゲ海岸とそれに近く位置するキオス Chíos (Sakız) 島、サモス Sámos 島、イカリア Ikaría 島等の島々を述べ、スポラデス諸島の南端ロードス Ródos 島に至る。ロードス島からは一轉して北西に進み、キクラデス諸島の東半分を傳ってエウボイア島の南のアンドゥロス Ándros 島に至る。

圖2　エ　ー　ゲ　海　域

İstanbul
Saros灣
Samothrákē
Thásos
İmroz Adası
Kilitbahir
Çanakkale
Lēmnos
Bozca Ada
Hágios Evstrátios
Skíathos
西スポラデス諸島
Alonnisos
Lésbos
Skýros
İzmir
Chíos
Évboia
Sámos
Athēnai
Ándros
Ikaría
Kéa
Bodnum
キクラデス諸島
Náxos
Kōs
スポラデス諸島
Mēlos
Anáphē
Ródos
Kárpathos
Krētē

この島の説明を終えた後、「İgribūz〔エウボイア〕から下のルーメリの海岸を説明する」と題して新たな章（第四七章）を起こし、その冒頭で次のように述べる（一部先の引用と重複する）。

「島の閒（ada arası）」といって知られており、異教徒たちが Arsūpalūgha と言い習わしている島々を順に然るべく説明した。さてそこで、ルーメリの海岸とフランクの海岸を Sabta 海峡〔ジブラルタル海峡〕に至るまで説明せねばならない。その後マグリブの海岸を説明しよう。巡ってアレクサンドリア İskandarīya、シリアの陸地を通ってアナトリアの海岸まで〔を説明しよう〕。再びロードス島へ來て、そこからカルパトス Karpa〔Kárpathos〕島とクレタ Karīt〔Krētē〕島と、〔キクラデス諸島の〕アナフィ Nāfa〔Anáphē〕、ミロス Değirmenlik〔Mēlos〕、ケア Mūrtād〔Kéa〕、〔西スポラデス諸島の〕スキロス İskirī〔Skýros〕、スキアトス İskādūs〔Skiathos〕、アロンニソス Jāmlīja〔Alonnisos〕の諸島を巡って海峡のヒサールへ我々は到着しよう、順番が亂されないように（tartib bozulmaya）。というのは、最初は海峡のヒサールから出發したのであり、またその兩城で終了すべきであるからである。

さてそこで、まずルーメリ海岸にあるアテネ Atanā〔Athēnai〕の海岸部を説明しよう。先に述べた İghribūs の Qīzīl-Ḥiṣār の正面に位置するルーメリ〔の海岸〕に天然の港がある。この港を Darzī Qayası と言う。……〔Ayasofya: 277〕

このように、アテネに近い海岸部から沿岸部を西方に向って順に説明してゆく。ピーリー・ライースがこの箇所で述べている通り、カルパトス島、クレタ島及びキクラデス諸島の西半分に位置する島々さらには西スポラデス諸島は本文の最後に説明されている。

直ちに氣附くことは次の二點である。(1)エーゲ海の説明が本文の最初と最後に二分されていること、(2)その二分の仕方及びそれぞれにおける説明順が奇異な印象をあたえることである。

いずれもエーゲ海のアナトリア側とギリシャ側の複雑な海岸線及び多數の島々をどのような順で説明するかという問題

である。(1)の點はそれ自體は特別問題とするに當らないかも知れない。エーゲ海が最初に扱われる理由をひとまず措くとすると、エーゲ海が通過點ではなく説明の出發點であり同時に終了點であるために、冒頭で扱われる部分と末尾で扱われる部分に二分されていてもそれはむしろ自然であろう。問題は(2)である。

幾つか疑問が浮ぶ。エーゲ海最北部の海岸部を西方へ、次いで南方へと進んでエウボイア島に至り、そこからレスボス島へと敍述が移るが、西スポラデス諸島がこの間で説明されないのは何故か。また、アンドゥロス島からすぐに「ルーメリの海岸とフランクの海岸」の説明に移らなければならない理由は何か。先にキクラデス諸島の西半分の島々及びカルパトス島、クレタ島等を説明しておいても一向に差し障りはないように見受けられる。

殘念ながら現時點でこの疑問に對する明確な解答の用意はないが、假説として次の二點が擧げられよう。一點目は、このピーリー・ライースの説明順が、エーゲ海における政治的狀況、或いは地域的な纏まりとそれら地域の相互關係など、當時の何等かの實態を反映しているのではないかということである。一例として考えられるのは次のようなことである。

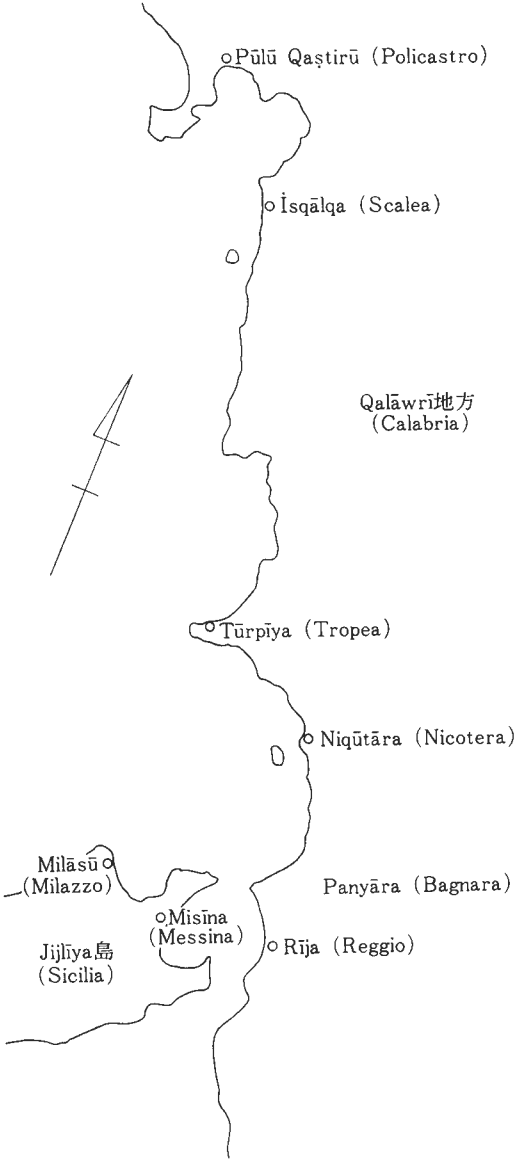
一五二二年オスマン朝の軍は聖ヨハネ騎士修道會の本據ロードス島を攻略し、修道會の支配下にあった、ロードス島を含むスポラデス諸島（ドデカネス諸島）はオスマン朝の支配下の島々となった。しかし、九三二年本が纏められた一五二六年當時キオス島、カルパトス島、クレタ島、キクラデス諸島、西スポラデス諸島はオスマン朝の支配下には入っていない。[15] ピーリー・ライースの敍述順はこういった事情を反映している可能性がある。卽ち、著者はまず當時オスマン朝の支配下にあった、エーゲ海最北部の島々とその對岸部及びエウボイア島、レスボス島、さらにはそこから南西方向のアナトリアの海岸とスポラデス諸島を含む沿岸の島々を説明し（ただしキオス島はオスマン朝支配下になく、ここでは例外的）、しかる後未だ支配下にはなかったがエウボイア島方向へ點々と續くキクラデス諸島東部を傳ってギリシャ岸に至り、地中海を一廻りしたあとで、支配下にない島々のうち殘ったカルパトス島、クレタ島、キクラデス諸島西部、西スポラデス諸島をまとめて説明したのではないか。こう考えれば、最も奇異に思われるエウボイア島からレスボス島への飛躍が幾分なりとも

理解しやすくなる。しかし、あくまで推定にとどまる。

二點目は、ピーリー・ライースが何等かの先人の著作を利用、あるいは參考にしているため、その文獻の内容が反映されているのではないかということである。その可能性もけっして否定できないであろう。いずれの考え方についても、十分な材料を用意できていない現状では推測に推測を重ねる結果となるため、これ以上深入りすることは避けたい。

(2) 西地中海北岸部分

圖3 イタリア半島南端部



Kurdoğlu-Alpagot 1935 所收 Ayasofya2612 寫本（ファクシミリ版）p.548 の地圖をもとに作成。海岸線，町の相對的位置は原圖に從っている。

この部分では、アドリア海からターラント灣にかけての地域を述べた後、シチリア島からコルシカ島そしてバレアレス諸島を説明する。その後本文五四四―六一七ページにわたってカラブリア半島南部からジブラルタル海峡までを述べる。ここは一三の地區に分かたれ、本文の第一二七―一三九章に相當する。それぞれの地區（章）の順序は、イタリア半島西部では南から北へ移動し、フランスからスペインにかけては東から西へ移動する。この點は本書全體の敍述の流れに從っており、特に問題はない。しかし、地區（章）の中での各地點の敍述は、それぞれ北から南へ、西から東へと逆行している。五四四ページから始まる第一二七章（本稿一二二ページ表1注②參照）は、

殘りの Kadalān の島々〔當時スペイン王國領であったシチリアなどの島々〕を我々は説明し終えた。〔ここまで〕來た。プリア Pūlya〔Puglia 實際は Calabria〕海岸から〔説明を〕再開しよう、順番に從って。

さて、いま述べた海岸のうち、最初はポリカストロ Pūlū Qaṣṭirū〔Policastro〕海岸を説明しよう。

まさにこのポリカストロと Isqālqa とトゥロペア Tūrpīya〔Tropea〕はプリアの諸城である。ナポリ Anābūlū〔Napoli〕とメッスィナ Misīna〔Messina〕海峡の間にある海岸である。さて、上述のもののうち、ポリカストロは町（shahr）である。その近くに、しかし南東側に Qāwu da Piyāsa という岬がある。その岬に Qāza という停泊地がある。しかしそれ程の停泊地ではない。というのは山の麓であり、また、深さが二尋半だからである。……〔Ayasofya：544―545〕

とあり、地區内で最も北に位置するためそれまでの敍述の形式に從えばこの章の末尾に説明されるはずの Pūlū Qaṣṭirū が、ここでは最初に述べられている。そして幾つかの町、港などを北から南方向に順に説明した後、

……さてこの Pānyāra から Alūsiliyū は南方に五マイルである。この Alūsiliyū から Qūda da Qūlpū 卽ち「股鍬狀の尾（chatal quyruq）」は南東・南西に（shuruq lodosa）五マイルである。ここから Qātūna は一マイルである、南南東に。―中略―この Qātūna からレッジオ Rīja〔Reggio〕の城は南南東に五マイルである。レッジオは城（qal'a）

である。その城の前は砂濱である。即ち、開けた波靜かな水域である。もしその砂濱で錨を下ろすならば、一四―一五尋〔の水深のところ〕で停泊する。レッジオの城からメッスィナの城は西北西に一一マイルである。さらに、レッジオのあとは Ṣān Juwān の入り江が良い停泊地である。深さは一二尋である。絶壁のところである。

さてこの Ṣān Juwān から Fūsa は南南東に六マイルである。かく知られるべし。以上。〔Ayasofya: 547〕

と締めくくられている。

さらに次の第一二八章は「本章は Pūlya Anāpūlūsī からポリカストロに至る海岸を説明する」と題して、ナポリから解説を始め、順次南下して先のポリカストロまでを説明する。以下ジブラルタル海峡のスペイン側を説明する第一三九章まで同様の形態をとる。

このような明瞭な逆行現象は、島嶼の場合も含めて海岸部の説明に關する限り他では殆ど見られず、極めて特異である。ジェノヴァからクレウス岬の閒の逆行現象については Mantran が既に指摘している〔Mantran 1985: 70〕が、Mantran もその理由には全く言及していない。筆者も理由については、エーゲ海の記述の場合と同様、現段階では確定的なことは言えない。ただ、これもまた假説の域をでないが、次に述べるような考慮すべき事柄があるように思われる。

Kislling は、この逆行部分のうちローヌ河デルタ地帶の記述内容を分析し、『キターブ・バフリエ』執筆の資料の問題に言及している〔Kissling 1973〕。その論文で Kissling は、まず文中で Aqwa-mūrt〔Aigues-Mortes〕の川と呼ばれるローヌ河、ドナウ河、ライン川が

SMYRNZDN と言われる大きな山から流れ出す〔Ayasofya: 594〕

というくだりに注目する。ここで Kissling は、これまで意味不明であった SMYRNZDN が正しくは SMBRNRDN であり、これが Saint-Bernardin（イタリア語名 St. Bernardino、ドイツ語名 Sankt Bernhard）を表わすと考え、さらにそれを現スイスの Graubünden 地方の Adula 山地の重要な峠 St. Bernhard に比定する。

そのうえで Kissling は、そのようなヨーロッパの内陸部についてのピーリー・ライースの地理概念が、上の三川の源流を Adula 山地の一帯においているプトレマイオスの『地理學』の説明に一致するという。さらに、それは決して單なる偶然ではなく、『キターブ・バフリエ』のこの部分についてピーリー・ライースが、當時既に存在していた、『地理學』のラテン語譯(16)あるいはイタリア語譯に依據した故であると指摘する。ただし、Adula 山地とあるところをさらに Saint-Bernardin 峠に限定して記述したのはピーリー・ライース自身の所作とする。

Kissling の主張は多分に推定を含み、その意味で假説に留まる。從って直ちに全面的に受け容れられるものではない。しかし、從來研究者が注目することのなかったヨーロッパ大陸内陸部に關する記述から、『キターブ・バフリエ』の典據資料の存在の問題に迫ろうとした點で注目すべきものと言えよう。

そこで、上で見た『キターブ・バフリエ』の敍述の逆行現象をこのような Kissling の考察も考慮に入れつつ考えてみると、少なくともこの逆行現象の起こっている部分ではピーリー・ライースが何等かの典據資料あるいは參考資料に基づいて敍述したのではないかとの念を強くする。卽ち、典據資料の敍述形態に制約されたため、『キターブ・バフリエ』の他の部分の敍述形態とは異質な述べ方が入り込んだ可能性がある。この考えもあくまで假説に過ぎない。また、假に逆行現象部分で何等かの典據資料が實際に存在したとしても、それが Kissling 言うところのプトレマイオスの『地理學』系統の文獻と限られる必然性はない。Kissling の主張はそれほど固い根據の上に立っているわけではない。ここでは、少なくとも逆行現象の部分に關する限り、典據資料の存在を想定する方がより眞實に近いと思われることを指摘するだけに留める。(17)

2　本文の構成の數量的分析

次に、『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612 寫本本文で扱われている地域を幾つかの區域に大きく分割し、構成を數

表1　『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612 寫本本文の區域別分量整理

	章	章數	全章數に對する百分率	ページ	ページ數	全ページ數に對する百分率	ページ數/章數 (イ)	①行數	全行數に對する百分率	行數/章數 (ロ)	イ/ロ (α)	ハ/ニ (β)
エーゲ海・イオニア海東部區域	**1- 81**	**81**	**38.6**	**1-323**	**323**	**42.3**	**4.0**	**3370**	**43.9**	**41.6**	**1.11**	**1.14**
冒頭部分	**1- 65**	**65**	**31.0**	**86-355**	**270**	**35.4**	**4.2**	**2887**	**37.6**	**44.4**	**1.17**	**1.21**
エーゲ海北西部（Évboia 島まで）	1- 9	9	4.3	86-129	44	5.8	4.9	485	6.3	53.9	1.36	1.47
アナトリア西岸（Ródos 島まで）	10- 33	24	11.4	130-242	113	14.8	4.7	1242	16.2	51.8	1.30	1.42
キクラデス諸島東部（Ándros 島まで）	34- 46	13	6.2	243-276	34	4.5	2.6	296	3.9	22.8	0.72	0.62
イオニア海東部（Dubrovnik 近邊まで）	47- 65	19	9.1	377-355	79	10.3	4.2	864	11.2	45.5	1.17	1.24
末尾部分	**195-210**	**16**	**7.6**	**796-848**	**53**	**6.9**	**3.3**	**483**	**6.3**	**30.2**	**0.92**	**0.83**
エーゲ海南西部（Kéa 島まで）	195-205	11	5.2	796-837	42	5.5	3.8	401	5.2	36.5	1.06	1.00
西スポラデス諸島及び Saros 灣	206-210	5	2.4	838-848	11	1.4	2.2	82	1.1	16.4	0.61	0.45
アドリア海・イオニア海西部區域	**66-119**	**54**	**25.7**	**356-485**	**130**	**17.1**	**2.4**	**1063**	**13.8**	**19.7**	**0.67**	**0.54**
アドリア海①（Venezia まで）	66- 93	28	13.3	356-429	74	9.7	2.6	602	7.8	21.5	0.72	0.59
アドリア海②（Vieste まで）	94-106	13	6.2	430-457	28	3.7	2.1	217	2.8	16.7	0.58	0.46
プリア海岸（Taranto まで）	107-115	9	4.3	458-476	19	2.5	2.1	167	2.2	18.6	0.58	0.51
カラブリア海岸（Spartivento 岬まで）	116-119	4	1.9	477-485	9	1.2	2.3	77	1.0	19.3	0.64	0.53
西地中海區域	**120-139**	**20**	**9.5**	**486-617**	**132**	**17.3**	**6.6**	**1511**	**19.7**	**75.5**	**1.83**	**2.06**
西地中海の諸島	120-126	7	3.3	486-544②	59	7.7	8.4	677	8.8	96.7	2.33	2.64
西地中海北岸	127-139	13	6.2	545-617	73	9.6	5.6	834	10.9	64.2	1.56	1.75
北アフリカ沿岸區域	**140-169**	**30**	**14.3**	**618-726**	**109**	**14.3**	**3.6**	**1119**	**14.6**	**37.3**	**1.00**	**1.02**
マグリブ（Misrata まで）	140-156	17	8.1	618-684	67	8.8	3.9	770	10.0	45.3	1.08	1.24
北アフリカ東部（Ramle まで）	157-169	13	6.2	685-726	42	5.5	3.2	349	4.6	26.8	0.92	0.73
シリア・南アナトリア沿岸區域	**170-194**	**25**	**11.9**	**727-795**	**69**	**9.0**	**2.8**	**619**	**8.0**	**24.8**	**0.78**	**0.68**
シリア海岸（Ayas まで）	170-177	8	3.8	727-750	24	3.1	3.0	219	2.8	27.4	0.83	0.75
アナトリア南岸（Marmaris まで）	178-194	17	8.1	751-795	45	5.9	2.6	400	5.2	23.5	0.72	0.64
本文全體	**1-210**	**210**	**100.0**	**86-848**	**763**	**100.0**	**3.6(ハ)**	**7682**	**100.0**	**36.6(ニ)**	—	—

本文736ページの內　説明文の合計　537ページ（70.4%）　地圖の合計　226ページ（29.6%）

注①　章の末尾で行の長さを次第に減じて中央に揃え逆三角形型に文を結ぶ場合など行の長さが不揃いな場合は，敍述の長さを比較する便宜上通常の行の長さに換算して數えている。從ってここでの數値は實際の行數より少ない場合がある。

②　各章は原則的に前章とページを改めて書き始められているが，第127章は例外的に第126章の關係地圖の描かれた544ページ下部に冒頭の2行を有する。本表では便宜上第127章が545ページから始まるものと看做している。

量的に分析した場合どのような特徴が見出せるか検討していきたい。表1は本文をエーゲ海・イオニア海東部區域、アドリア海・イオニア海西部區域、西地中海區域、北アフリカ沿岸區域、シリア・南アナトリア沿岸區域の五區域に分割して章數、ページ數等を整理したものである。エーゲ海・イオニア海東部區域については、本文の冒頭で説明される部分と末尾に説明される部分を區別したうえで、それぞれをさらに小さな範圍に區切って示してある。

この表における區域の區切り方は、『キターブ・バフリエ』の中でピーリー・ライース自身が特に示しているものではない。各章の章題中で用いられている地域名、歸屬を示す語[18]及び各章の內容を檢討した上で筆者が區切ったものである。その意味で決して固定的、最終的なものではない。むしろ如何に區域を區切るか、その區切り方自體が多くの示唆的な問題を含んでいる檢討課題である。例えば、ピーリー・ライース自身の地域の捉え方、名稱の與えかたをどう我々が理解するか、卽ちピーリー・ライースの地域概念の問題などを含んでいるのである。從って、表1に示された區域は、『キターブ・バフリエ』本文の構成の數量的分析を試みるために、筆者の理解の範圍內で最も妥當と思われる區切り方を暫定的に採用したものである。

(1) 區域毎の敍述分量

さて、この表1から特徵的な事柄が浮び上がる。『キターブ・バフリエ』が地中海全體の姿を記述していることは閒違いないものの、本文の構成はけっして一樣ではなく、その敍述の分量の區域毎の比重には大小がある。特にエーゲ海・イオニア海東部區域とアドリア海・イオニア海西部區域の比重が大きい。

章數に注目した場合、エーゲ海・イオニア海東部區域は全體の三八・六%、アドリア海・イオニア海西部區域は二五・七%であり、計六四・三%を占める。各章末の地圖も含めた本文のページ數では前者が全體の四二・三%、後者は一七・一%、計五九・四%である。これに對して他の地域は比較的分量が少なく、西地中海、北アフリカ沿岸、シリア・南アナ

トリア沿岸の三區域合わせて章數で三五・七%、ページ數で四〇・六%である。敢えて大雑把な表現をすれば、今日の地圖上で地中海を東西、南北の線で大きく四分した場合、エーゲ海・イオニア海東部區域とアドリア海・イオニア海西部區域はほぼその北東部の四分の一の中に收まる海域と言えるが、その海域が『キターブ・バフリエ』では章數、ページ數ともにほぼ六割の比重を占めていることになる。また同樣に行數（本稿一二二ページ表1注①參照）に注目すると、エーゲ海・イオニア海東部區域は四三・九%、アドリア海・イオニア海西部區域は一三・八%、從って兩者で五七・七%になる。章數、ページ數に比べてやや小さい値とはいえ、やはり全體の六割に近い數字を示す。

このように、章數、ページ數、行數のいずれに注目してもエーゲ海・イオニア海東部區域と、アドリア海・イオニア海西部區域の記述の量的な比重の大きさは顯著であり、この點は Ayasofya2612 寫本で見る限り、『キターブ・バフリエ』の一つの特徴と言えよう。

理由としてはまず次のような點が考えられよう。

①自然條件　エーゲ海・イオニア海東部區域、アドリア海・イオニア海西部區域（特にその東岸部）は海岸線が複雑に入り組んだ所が多い。大陸部の海岸線の複雑な地域は沿岸の島嶼の數も多く、その島々も複雑な海岸線をもつ場合が多い。從って岬や入り江が多く、自然の良港に多く惠まれている。

②社會的條件　これらは古くから沿岸交通が特に發達していた地域であるため、航行のための情報として説明されるべき重要な都市、港などが數多く存在している。

しかし、こういった點を勘案しても、兩區域の比重の大きさはやはり特異な印象を與えると言わねばならない。また、エーゲ海・イオニア海東部區域あるいはアドリア海・イオニア海西部區域に劣らず著者ピーリー・ライースにとってゆかりが深いと思われる北アフリカ、特にその西部が章數、ページ數ともに全體の僅か八%程度に過ぎず、行數でも一〇・〇%を占めるに留まることを考慮すれば、エーゲ海・イオニア海東部區域とアドリア海・イオニア海西部區域の量的な特異

性がより鮮明に浮び上がってくる。[19] そこで、兩區域が著者にとって特別に關心度、重要度の大きい地域であったのではないか、あるいは、著者のこの地域に關する知識が、文獻等によるものも含めて、特に豐富であったのではないかといった點も理由として考えておかねばならないであろう。[20] 現在の段階ではいずれとも斷定はできない。いずれにせよ、『キターブ・バフリエ』が地中海全體を對象にしつつも、その敍述に地域的な量的不均衡が見られることは注目すべき事實であろう。

(2) 一章當りの敍述分量

また、ここで注意しておくべき事は、一章當りのページ數、行數を比較した場合、區域によって差が見られ、幾つかの特徵的な事柄が浮び上がることである。各區域毎に、一章當りのページ數を全體の平均値三・六（表1(ロ)）で除した數値（α）、一章當りの行數を全體の平均値三六・六（表1(ニ)）で除した數値（β）をとってみる。言うまでもなくα、βの値の大小は、一章當りのページ數と行數の平均値に對する相對的な多少を示し、從って値が大きいほど概して敍述は詳しいと考えられ、値が一に近いほど平均的であることになる。結果の數値は表1に示されているが、見やすくするために關係部分のみここに掲げるとうえの通りである。

	α	β
エーゲ海・イオニア海東部區域	1.11	1.14
冒頭部分	1.17	1.21
末尾部分	0.92	0.83
アドリア・イオニア海西部區域	0.67	0.54
西地中海區域	1.83	2.06
北アフリカ沿岸區域	1.00	1.02
シリア・南アナトリア沿岸區域	0.78	0.68

この數値からα、βそれぞれの値は、全體を通じて必ずしも一樣ではないものの概ね〇・五から一・二前後の域におさまるが、しかし西地中海區域ではα、βの値がそれぞれ極めて大きいことを指摘できる。

西地中海區域をさらに詳しく檢討すると、この區域の中でも「西地中海の諸島」の部分が

α＝二・三三、β＝二・六四となり、非常に高い値である。これはこの區域に大きな島が存在し、それぞれ一章を當てて扱っているために一章當りのページ數、行數が多くなることの反映であろう。この事情が西地中海區域全體の數値を押し上げていると考えられる。(21)

しかし問題はそれよりもむしろ、「西地中海北岸」の數値もα＝一・五六、β＝一・七五と平均よりもかなり高いことである。この區域には大きな島などはあまり無く、陸側の海岸線の説明が主であるが、それにも拘らず一章當りの記述量が多い。この區域では地理的な範圍の廣さに比して章數が少なく、從って一章で扱われる範圍は相對的に廣い。その點もα、βの値が大きくなっていることの要因として擧げられる。いずれにしても、これは西地中海區域とりわけ「西地中海北岸」が『キターブ・バフリエ』の中でも特異な區域であることを示すものである。(22)

このように、數量的な分析を試みると、『キターブ・バフリエ』の本文においては各區域毎の敍述分量の不均衡のみならず、一章當りのページ數、行數といった敍述の形態にも不均衡が見られる。なお、Soucek も敍述量について地域的な不均衡があることを指摘している〔Soucek 1973a: 246〕が、地域の區切り方も含めて、根據となる數字は一切示していない。

Ⅲ　Ayasofya2612 寫本本文の內容上の問題

ここでは『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612 寫本本文の內容上の問題を檢討する。

本文中に盛り込まれた情報は次の三種に大別できる。

①地理的情報　地形（港、川、山、都市、村、潟など）、風、潮の滿干など

②航海法情報　操船法、船の種類など

③歷史的情報　オスマン朝關係、ヨーロッパ人關係、北アフリカ關係など

この內分量的に主體となるのは①地理的情報、②航海法（操船方法）に關する情報である。量的な面ばかりでなく、記述

内容の點でも興味深いものを含んでいるのであるが、その分析、檢討は今後の課題とし、ここでは③の歴史的情報に限定して檢討する。それは『キターブ・バフリエ』を歴史學の資料として如何に扱うべきか、換言すれば『キターブ・バフリエ』から如何なる歴史的事實を讀み取れるかという筆者の問題意識があるからでもある。なお、ピーリー・ライースが上の三種の情報を明瞭に區別して敍述している譯ではないため、どのような記述を歴史的情報として取り上げるべきか判斷しかねる場合がある。原則として、明らかに①②のいずれにも屬さず、なんらかの意味で我々に歴史的な事實關係を傳える內容を歴史的情報として採り上げている。傳說、傳聞の類も、それが當時ピーリー・ライースあるいは人々に傳わっていたこと自體が歴史的事實であるとの考えに立って③に含めて採り上げている。また、ピーリー・ライースらが主體となる行爲も今日の我々にとって歴史的情報であるので③に含める。單なる物產の紹介などは除外した。

1　歴史的情報の區域毎の頻度

歴史的情報は必ずしもすべての章に記述されているわけではない。歴史的情報を一件でも含む章を數えあげると八八章であり、これは全體の四二%にあたる。從って、地理的情報または航海法情報のみで歴史的情報を含まない章が一二二章、全體の五八%となり、半數以上を占めている。歴史的情報の現われる頻度を、先に區切った區域毎に整理すると表2(i)の部分）の通りである。

まず、各區域における歴史的記述を含む章の數の、その區域の全章數に對する比率（B/A）を見る。全體の平均は〇・四二であり、エーゲ海・イオニア海東部區域が〇・四一、アドリア海・イオニア海西部區域が〇・二〇、シリア・南アナトリア沿岸區域が〇・二八といずれも平均よりも小さい値を示す。それに對して西地中海區域、北アフリカ沿岸區域の數値はそれぞれ〇・九〇、〇・六三であるから、これらの區域では歴史的情報を含む章は平均の一・五倍から二倍の頻度で現われることになる。

表 2　『キターブ・バフリエ』 Ayasofya2612 寫本本文の歴史的情報の整理

	A 章數	B 歴章	(i) B/A	C 歴件	C/A	D 我章	(ii) D/B	E 我件	E/C	F 賊章	F/B	G 賊件	G/C	H 賊我章	(iii) I 賊我件	H/D	I/E	H/F	I/G
エーゲ海・イオニア海東部區域	**81**	**33**	**0.41**	**37**	**0.46**	**3**	**0.09**	**3**	**0.08**	**16**	**0.48**	**18**	**0.49**	**1**	**1**	**0.33**	**0.33**	**0.06**	**0.06**
冒頭部分	**65**	**29**	**0.45**	**33**	**0.51**	**3**	**0.10**	**3**	**0.09**	**14**	**0.48**	**16**	**0.48**	**2**	**2**	**0.67**	**0.67**	**0.14**	**0.13**
エーゲ海北西部（Évboia 島まで）	9	6	0.67	8	0.89	1	0.17	1	0.13	3	0.50	3	0.38	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
アナトリア西岸（Ródos 島まで）	24	10	0.42	11	0.46	1	0.10	1	0.09	2	0.20	3	0.27	1	1	1.00	1.00	0.50	0.33
キクラデス諸島東部（Ándros 島まで）	13	7	0.54	7	0.54	0	0.00	0	0.00	3	0.43	3	0.43	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
イオニア海東部（Dubrovnik 近邊まで）	19	6	0.32	7	0.37	1	0.17	1	0.14	6	1.00	7	1.00	1	1	1.00	1.00	0.17	0.14
末尾部分	**16**	**4**	**0.25**	**4**	**0.25**	**0**	**0.00**	**0**	**0.00**	**2**	**0.50**	**2**	**0.50**	**0**	**0**	**0.00**	**0.00**	**0.00**	**0.00**
エーゲ海南西部（Kéa 島まで）	11	3	0.27	3	0.27	0	0.00	0	0.00	1	0.33	1	0.33	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
西スポラデス諸島及び Saros 灣	5	1	0.20	1	0.20	0	0.00	0	0.00	1	1.00	1	1.00	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
アドリア海・イオニア海西部區域	**54**	**11**	**0.20**	**11**	**0.20**	**0**	**0.00**	**0**	**0.00**	**0**	**0.00**	**0**	**0.00**	**0**	**0**	**0.00**	**0.00**	**0.00**	**0.00**
アドリア海①（Venezia まで）	28	3	0.11	3	0.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
アドリア海②（Vieste まで）	13	7	0.54	7	0.54	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
プリア海岸（Taranto まで）	9	1	0.11	1	0.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
カラブリア海岸（Spartivento 岬まで）	4	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
西地中海區域	**20**	**18**	**0.90**	**27**	**1.35**	**9**	**0.50**	**12**	**0.44**	**7**	**0.39**	**12**	**0.44**	**7**	**9**	**0.78**	**0.75**	**1.00**	**0.75**
西地中海の諸島	7	6	0.86	11	1.57	4	0.67	7	0.64	3	0.50	7	0.64	3	5	0.75	0.71	1.00	0.71
西地中海北岸	13	12	0.92	16	1.23	5	0.42	5	0.31	4	0.33	5	0.31	4	4	0.80	0.80	1.00	0.80
北アフリカ沿岸區域	**30**	**19**	**0.63**	**29**	**0.97**	**11**	**0.58**	**14**	**0.48**	**10**	**0.53**	**11**	**0.38**	**6**	**6**	**0.55**	**0.43**	**0.60**	**0.55**
マグリブ（Misrata まで）	17	14	0.82	23	1.35	10	0.71	13	0.57	9	0.64	10	0.43	6	6	0.60	0.46	0.67	0.60
北アフリカ東部（Ramle まで）	13	5	0.38	6	0.46	1	0.20	1	0.17	1	0.20	1	0.17	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
シリア・南アナトリア沿岸區域	**25**	**7**	**0.28**	**7**	**0.28**	**1**	**0.14**	**1**	**0.14**	**2**	**0.29**	**2**	**0.29**	**0**	**0**	**0.00**	**0.00**	**0.00**	**0.00**
シリア海岸（Ayas まで）	8	2	0.25	2	0.25	0	0.00	0	0.00	1	0.50	1	0.50	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
アナトリア南岸（Marmaris まで）	17	5	0.29	5	0.29	1	0.20	1	0.20	1	0.20	1	0.25	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
本文全體	**210**	**88**	**0.42**	**111**	**0.53**	**24**	**0.27**	**30**	**0.27**	**35**	**0.40**	**43**	**0.39**	**15**	**17**	**0.63**	**0.57**	**0.43**	**0.40**

凡例　歴章　歴史的情報の記述がある章の數
歴件　歴史的情報の件數
我章　「我々」あるいは「私」が當事者となって現われる記述のある章の數
我件　「我々」あるいは「私」が當事者となって現われる記述の件數
賊章　海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲の記述がある章の數
賊件　海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲の記述の件數
賊我章　「賊章」のうち，「我章」でもあるものの數
賊我件　「賊件」のうち，「我件」でもあるものの件數

また歴史的情報の件數は、私の數え方で八八章中に一一一件ある。全體が二一〇章からなるのであるから、本文全體の歴史的情報の章當りの頻度は〇・五三となる。そこで區域毎に、歴史的記述の件數をその區域の章數で除し、章あたりの歴史的記述の頻度（C/A）を見る。その結果、エーゲ海・イオニア海東部區域は〇・四六で比較的平均に近いもののそれより低く、アドリア海・イオニア海西部區域は〇・二〇、シリア・南アナトリア沿岸區域は〇・二八で、ともに平均の二分の一前後のかなり低い値を示す。一方、西地中海區域は一・三五、北アフリカ沿岸區域は〇・九七となり、平均の二倍から三倍に及ばんとする値を示し、目立って大きい値と言えよう。

このように、歴史的記述を含む章の數でも、また歴史的記述の件數自體でも、西地中海、北アフリカ沿岸區域は、他の區域と比較して相當に高い頻度を示す。先に見たところでは、章數の點ではエーゲ海・イオニア海東部區域、アドリア海・イオニア海西部區域の比重が大變に大きかった。從って章數の多少のみに注目すれば、エーゲ海・イオニア海東部區域、アドリア海・イオニア海西部區域は相對的に詳しく説明されているとも言える。しかし區域毎に區域全體の説明に對する歴史的情報の比重を考えると、西地中海區域、北アフリカ沿岸區域が大きい値を示す。このような點から、各區域の敍述において數量的のみならず質的な差異も存在することが知られるのである。

それでは、西地中海區域、北アフリカ沿岸區域の説明の中に相對的に歴史的情報が多く含まれているのは何故であろうか。

2　歴史的情報の當事者

そこで歴史的情報の當事者に注目して、本文中で主體者が「私」あるいは「我々」と示されている記述を抽出して、その頻度を數値で示すと表2（(ii)の部分）のようになる。言うまでもなくここでいう「私」、「我々」とは、それぞれピーリー・ライース自身、ピーリー・ライースとその仲閒たち（カマール・ライースも含む）のことである。ここで示された數値か

ら特徴的な事實を讀み取ることができる。

西地中海區域と北アフリカ沿岸區域において、章數、件數のいずれもその實數及び當該區域の歴史的情報に占める比重の數値（D/B、E/C）が、他の區域と比較して格段に大きいのである。西地中海區域の場合は、章數の實數は九章、比率が〇・五〇であり、件數の實數は一二件、比率が〇・四四となる。同じく北アフリカ沿岸區域ではそれぞれ一一章〇・五八および一四件〇・四八である。他の區域での數値が實數で一ないし三件（章）、比率でも章數、件數いずれの場合も最大〇・一四に留まるのに比べて、平均の二倍前後を示すこれらの數値は際立って大きな値と言える。また兩區域を合せて考えると、九章一二件及び一一章一四件、計二〇章二六件であり、この兩區域で本文全體に現われるこの種の記述（二四章三〇件）の八〇％以上を占めていることになる。即ち、兩區域では主體者が「私」あるいは「我々」の記述がまず特徴的と言えるのである。

3　歴史的情報に現われた行爲內容

さらに歴史的情報の中で注目されるのは、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲である。例えば、フランスのトゥーロンの沖のイエール（Īzla Dara）諸島を述べた部分で、

まさにこのイエール Īzla Dara 諸島をトルコの人々は「三つの島」という。フランス國ではその島々は有名である。トルコとアラブの艦隊が襲撃する所である。というのは、その海岸部から商いをするカーフィルの船が絶えることなく、常に往來しているのである。我々は故カマール・ライースと、一度ここで三隻のバルチャを一舉に襲撃した。それからチュニスに移して賣った。〔Ayasofya：578〕

といった記述がある。他の箇所でもこれに類する記述、あるいは軍事的な征服行動に關わる記述が見出される。

その實數を見ると、西地中海區域では七章一二件、北アフリカ沿岸區域では一〇章一一件である。歴史的情報を含む章

數に注目した場合の頻度（F/B）は前者が〇・三九、後者は〇・五三であり、平均値〇・四〇に近い値である。また、歴史的情報の件數に注目した場合の頻度（G/C）は、前者が〇・四四、後者が〇・三八となり、これも平均値〇・三九にごく近い値となる。その他の各區域も平均に近い値を示しており、歴史的情報における海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲の記述の比重を見る限り、ここで注目している兩區域についてはとりわけて特徴的な事實はない。

しかし、それぞれの區域内で、主體者が「私」あるいは「我々」の記述に占める、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述の比重（H/D、I/E）は、西地中海區域が章數に注目した場合〇・七八、件數に注目した場合〇・七五となり、また北アフリカ沿岸區域がそれぞれ〇・五五、〇・四三である。いずれも二分の一から四分の三に及ぶ數値であり、かなり高い値であると言える。これらの數値は、西地中海區域、北アフリカ區域において「私」あるいは「我々」が主體となって語られる時には、それが海賊行爲や征服行爲に類する行爲に關わることが多いことを示す。

逆に、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述に占める、「私」あるいは「我々」が主體者となっている記述の比重（H/F、I/G）に注目すると、西地中海區域においては、章數では海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述のある七章のすべてに「私」あるいは「我々」が登場し、件數でも「私」あるいは、「我々」が主體になっているものが七五％あることが分かる。北アフリカ區域では、それぞれ六〇％、五五％の數値となっている。これらの數値は他の區域（〇ないし六％）に比較して兩區域が斷然抜きん出ていることを示す。卽ち兩區域では、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲の主體は、「我々」や「私」である場合が多く、他の區域と比較しても特徴的であることが分かる。

以上本節で檢討した所から以下の點が明らかになる。

①歴史的情報は西地中海區域、北アフリカ沿岸區域に相對的に多い。

②兩地域では、「私」あるいは「我々」が主體者となっている歴史的情報の件數は區域全體の二分の一近くにのぼり、それ自體が特徴的事實である。

③兩區域の歴史的情報の內譯では、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述は多いが、それは他の區域と比較して特に顯著ではない。

④しかし、「私」あるいは「我々」が當事者となっているもののうちに占める海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述は高い率を示し、「私」あるいは「我々」が語られる時にはその內容は海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わることが多い。

⑤逆に、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述のうちで「私」あるいは「我々」が主體者となっているものは、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關わる記述を含む章及びその件數全體の半數以上に及ぶ。卽ち兩區域では、海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲の主體は「我々」や「私」であることが多い。

卽ち、西地中海區域、北アフリカ沿岸區域については、ピーリー・ライースとその仲閒たちの海賊行爲あるいは征服行爲に類する記述が多く、そのことが他の區域と比較して目立って歴史的情報の比率が高い理由となっている。(23)

これはピーリー・ライースとその仲閒たちの活動の主要な舞臺が、地中海の他の地域のいずれでもなく、この兩區域であったことを示唆するものである。彼らの活動の舞臺がこの地域であったことは既に指摘されていることであり、特別目新しい事實ではないが、『キターブ・バフリエ』にもこのような形で反映されていることが看取できる。

このような意味で兩區域は『キターブ・バフリエ』の中でも異色の區域に屬するが、その異色性は海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲以外の記述を檢討すればさらにはっきりする。例えば北アフリカの「スルターンたち」（ハフス Ḥafṣ 朝などの君主たち）に關わる同時代的でかなり具體的な記述は、ピーリー・ライースたちのこの地域との關わりの深さを如實に物語るものである。しかし、ここではそのことには直接觸れない。(24)

また翻って、ピーリー・ライースたちが直接的體驗を有し、活動の舞臺としていながら參照文獻の存在を強く疑わせる敍述の逆行現象が起こっている西地中海北岸はとりわけ特異な地域と言える。

さらに、西地中海區域、北アフリカ兩區域に關して言えば、歴史的情報として括ったこれらの情報を見渡して、その多くがピーリー・ライースたちの實體驗であることは、オスマン朝の地中海に關する知識は、當然他の文獻に依存した可能性も想定せねばならないとしても、少なくともその一部分は自らの臣民の實體驗に基づくものであったことを示しており、オスマン朝は地中海及びその周邊地域に關してヴィヴィッドな知識を得ることが可能であったことを示唆している。そのような知識はスルターンの耳目に達することが可能であったのであり、『キターブ・バフリエ』はまさしくその證左でもある。『キターブ・バフリエ』は地理的情報、航海法情報のみならず、歴史的、卽ち當時の時點で考えれば同時代的な、地中海各地の事情を傳える時事情報をも盛り込んだものであったと言えるのである。

おわりに

オスマン朝と地中海の關わりを考えてゆくための基礎的な作業として、『キターブ・バフリエ』九三二年本に屬する一寫本である Ayasofya2612 寫本の本文の構成、內容の檢討を通じて、『キターブ・バフリエ』本文の性格を論じてきた。本稿で明らかになった點を整理すると次の通りである。

(1)本文の敍述の流れの檢討から、敍述の流れには規則性が見られるものの、エーゲ海・イオニア海東部區域及び西地中海區域（特に西地中海北岸部分）ではその規則性が明らかに破られている。

(2)本文の構成の數量的な檢討をすると、區域毎の記述量（章數、ページ數、行數）の點では、エーゲ海・イオニア海東部區域とアドリア海・イオニア海西部區域の比重が大きい。

(3)同じく一章當りの記述量の點では、西地中海區域特に北岸部の記述量が多く、特異である。

(4)本文に含まれた歴史的情報の檢討から、歴史的情報は西地中海區域、北アフリカ沿岸區域に相對的に多く、その理由はピーリー・ライースらの海賊行爲あるいは征服行爲に類する行爲に關する記述が多いことである。

(5)西地中海北岸は敍述の流れ、章當りのページ數、行數の相對的な大きさ、さらには歴史的情報の量と內容のいずれの點でも特異な性格を有する。

(6)『キターブ・バフリエ』には地中海に關する同時代的な情報が盛り込まれ、オスマン朝はそのような情報を利用可能であった。

今後は、各寫本の所在を再度確認すること、九二七年本と九三二年本それぞれの系統の中での寫本の比較檢討、さらに兩系統相互の比較檢討といった作業が必要になる。これまでしばしば研究者の關心の對象となり、本稿でも僅かながら言及した『キターブ・バフリエ』の參照文獻の問題も、そういった作業がある程度進捗した時點ではじめて檢討可能になるであろう。また、特異性の際立つ西地中海北岸については、特に關心をもって様々の角度から檢討を進める必要がある。

註

(1) 地中海がそれを取卷く様々の民族、集團の交通、交流を可能にする事により、そこに自ずから形成されていたと考えられる一つの固有な世界卽ち地中海世界を想定した場合、オスマン朝のアナトリアでの勃興と海岸部の征服はオスマン朝の地中海世界への參入を意味するのであり、オスマン朝の地中海での隆勢とその制覇は卽ちオスマン朝の地中海世界との關與の深化及びそこでの存在の重要化に他ならない。

(2) 三橋冨治男『オスマン・トルコ史論』吉川弘文館　一九六六、二一一—二三四ページ。

(3) カマール・ライースの兄弟 Ḥājī Muḥammad の子とされるが、カマール・ライースの姉妹の子とする說もある。この點は、ピーリー・ライース自身の說明に食い違いがある。『キターブ・バフリエ』の二系統の寫本のうち、九二七年本系では姉妹の子と言い、九三二年本系では兄弟の子と言っている（本稿本文一一〇—一一一ページ及び註(8)參照）。

(4) Bursalı Mehmet Tahir, *Osmanlı Müellifleri*, İstanbul 1915—28, vol. 3, p. 315, 註(5) 參照。ただし、Bursalı Mehmet Tahir の記述は根據が不明である。また『キターブ・バブリエ』Ayasofya2612 寫本冒頭部（三ページ）では Pirî Ra'is b.al-Ḥājī Muḥammad と記されているのみである。

(5) この嫌疑については、Cengiz Orhunlu, Hint Kaptanlığı ve Pirî Reis, *Belleten*, 34 (1970), pp. 235—254 を參照。

(6) 以下 Kurdoğlu-Alpagot 1935 に納められた Ayasofya

2612 寫本のファクシミリ版の參照ページをこのような形式で示す。

（7） Yurdaydın は、*Ghazawāt-i Khayruddīn Pasha*（その一部が *Fathnāma-i Khayruddīn Pasha* の名で知られている）の著者として知られる Murādī が、その著作の中で、かつて *Bahrnāma* なる書物を著わしたが、その書物によって生まれた名聲はすべて Pirī なる者に歸した、と述べていることを指摘し、『キターブ・バフリエ』はピーリー・ライースが用意してあった材料を Murādī が纏めたものと斷定した〔Yurdaydın 1952〕。この主張は學界の通說となっているが、同時にピーリー・ライースが第一義的な著者であって通常『キターブ・バフリエ』の著者をピーリー・ライースとすることもそれ以後特に異論無く定着していると思われる。

（8） 兩系統の體裁、內容上の相違を Kurdoğlu-Alpagot 1935 の解說部等の先學の研究をも參考にして纏めれば次のようになる。

(1)散文序で

①執筆理由を述べた部分の表現の違い

②著者自身にかかる說明の違い

九二七年本系ではカマール・ライースの姉妹の子とし、九三二年本系ではカマール・ライースの兄弟の子とする

などの相違點が見られる。

(2)九三二年本系にのみ韻文の歷史、地理、航海法などに關する解說がある。

(3)九三二年本系のみ本文を散文で書く理由を述べ、知識が必要となったその場ですぐ理解できることを意圖したとする。

(4)九二七年本系の寫本の多くは一三〇圖前後の地圖を持つが、九三二年本系は二二〇圖前後である。

(5)九二七年本系の寫本で町ごとに述べられる歷史的情報が、九三二年本系の方では地理的・專門的情報にかえられている。

(6)九三二年本系にのみ九一の對句からなる韻文の跋がある。

(7)九三二年本系寫本では、奧書（colophon）を持たないため書寫生、書寫年代を特定出來ない場合が多い。

なお兩系統の寫本の說明については Soucek 1973a も參照のこと。

（9） Bursalı Mehmet Tahir によれば、ピーリー・ライース自身によって九三二年に寫された寫本（原本とまでは明言していない）が、ヒジュラ曆一三四二年（西曆一九二三／四）の數年前に「フランスの博物館 Fransa Müzesi」によって買い取られ、元々それはイスタンブル在住の一人物の手許にあったが、故あって賣り拂われたのだという〔ibid.〕。事實とすれば、Bibliothèque nationale 所藏の九三二年本系寫本である Supplément turc 956 がそれにあたるのであろうか。Bibliothèque nationale 所藏トルコ語寫本のカタログを編集した Blochet は Supplément turc 956 について、母音點附きのナスフ體で四三四葉、一六世紀後半に屬す

るとしているが、來歴を示唆する事柄は何も語っていない（Blochet, E., *Bibliothèque nationale, Catalogue des Manuscrits turcs*, Tome 2, Paris 1933, p.108）。また Soucek は『キターブ・バフリエ』のチュニジア部分の記載の比較にあたってこの Supplément turc 956 も使用しており、簡單な解説を加えているが、やはり來歴には一切言及していない［Soucek 1973b：137］。筆者は Supplément turc 956 を詳しく検討していないため、何とも判斷し難い。

（10）Afet İnan 1974 で示された寫本リストは Kurdoğlu-Alpagot 1935 に倣ったのであろう。

（11）それぞれの寫本の傳來を正確に把握、檢討した上で議論すべき問題であるが、この兩系統の寫本の所在地の際だった相違が『キターブ・バフリエ』が實際に使用された當時の流布の態様をある程度反映しているとすれば、九二七年本は廣く西方にも流布し、九三二年本はイスタンブルを中心としたごく限られた範圍で流布したにとどまったことになる。このことは兩系統の受容のされ方が異なることを示し、さらには兩者の性格も異なっていたのではないかとも疑わせる。

（12）出版に際して特にこの寫本が選ばれた理由は定かではない。書寫年代が比較的古いと考えられること、文字部分の誤りが少ないこと［Soucek 1973b：136］、保存狀態が良いことなどによるものであろうか。

なお、一九八九年九月筆者がイスタンブルを訪れた際、Ayasofya2612 寫本所藏元の Süleymaniye 圖書館館長 Muammer Üiker 氏の計らいにより、原本を檢討する機會を得た。記して氏のご好意に感謝する。

（13）Soucek 1973b：136。從ってこの Soucek の説明を受けいれるとすれば、Ayasofya2612 寫本の書寫年代は一六世紀前半となる。

（14）Kurdoğlu-Alpagot 1935 では二〇九章とされるが誤り。Soucek は正しく二一〇章としている［1973a：246］。

（15）Pitcher, D. E., *An Historical Geography of the Ottoman Empire*, Leiden 1972, pp.83—87, Map XIV.

（16）織田武雄氏によれば、一四〇六年にヤコポ・アンジェロによって完成している（織田武雄監修、中務哲郎譯『プトレマイオス地理學』東海大學出版會　一九八六年、ii）。

（17）Kahle は、イタリア語、ギリシャ語などによる著作が既に存在し、それをピーリー・ライースが自ら翻譯したか、あるいは翻譯されていたものを利用したと見なしている［Kahle 1929：64—65］。しかし、利用された文獻はそこでははっきりと指摘されてはいないし、また別途發見されてもいないため、その主張の根據は極めて薄いと言わざるを得ない。一方、ピーリー・ライースの言葉を額面通りに受け取って全て實體驗と斷定する Afet İnan の主張も説得力に缺ける。廣大な地中海全體の、そのまた多數の地點について微に入り細を穿つが如き記述が全て一人の人物の實體驗に基づくとはにわかに受けいれ難いことからも、何らかの基礎的著作の存在を否定し切れないように思われる。

（18）例えば、「ヴェネーツィア灣（Wanadik körfezi）にある某所を説明する」、「カタランの島々の一つである某所を説

明する」などの表現。

(19) Soucek は「最も詳しく (avec le plus détail)」敍述されている地域としてエーゲ海、ギリシャ沿岸とイオニア諸島、北アフリカ（なかんずくブジャーヤートリポリ間）の三地域を指摘している〔1973a: 246〕。「詳しい」とは如何なる意味か判斷しかねるが、敍述の分量だけに注目すれば、既に見た通りエーゲ海・イオニア海東部區域、アドリア海・イオニア海西部區域では斷然多いが、北アフリカ區域では特に目立って多い譯ではない。

(20) Soucek はエーゲ海、ギリシャ沿岸とイオニア諸島、北アフリカ（なかんずくブジャーヤートリポリ間）の三地域で敍述が詳しい理由としてそれぞれ、ピーリー・ライースの生地であること、ピーリー・ライースがカマール・ライースと參戰した海域であること、一五〇〇年前後カマール・ライースの活動據點であったことを擧げている〔Soucek 1973a: 246〕。

(21) エーゲ海・イオニア海東部區域にも大きな島は存在するが、西地中海區域ほど極端に α、β の値は大きくならない。小さな島も多いために、それらが數値を引き下げていると考えられる。

(22) 先に檢討した、西地中海北岸區域での逆行現象も勘案すれば、この區域の特殊性がより明瞭になろう。

(23) 北アフリカのチュニジア地域にピーリー・ライースの實體驗に基づく記述が多いことは、既に Soucek が指摘している〔Soucek 1973b: 131〕。しかし、Soucek は『キターブ・バフリヤ』の本文全體を分析した上でチュニジア地域を位置付けてはおらず、また同樣に、地中海全體の中でこの地域の記述の特異性を明らかにした譯でもない。

(24) 北アフリカの「スルターンたち」に關しては、Soucek 1973b, Esin 1980 を參照。

參考文獻表

Cardonne, D. D.,

1765: (trad.) *Le Flambeau de la Méditerranée*, Bibliothèque nationale, 寫本番號 Fr. 22. 972.

von Diez,

1811: *Denkwürdigkeiten aus Asien*, Berlin.

Esin, Emel,

1980: La Géographie tunisienne de Pirî Re'is, à la Lumière des Sources turques du Xe/XVIe Siècle, *Les Cahiers de Tunisie*, (Numéro spécial), pp. 585—605.

Herzog, R.,

1902: Ein türkisches Werk über das ägäische Meer aus dem Jahre 1520, *Mitteilungen des Kaiserlich Deutschen Archäologischen Instituts, Athenische Abteilung*, 27, pp. 417—430.

İnan, Afet,

1937: Bir Türk Amiralı, XVIncı Asrın Büyük Coğrafı: Piri Reis, *Belleten*, 1, pp. 317—332, 333—354.

1974: *Piri Reis'in Hayatı ve Eserleri*, Ankara.

1975: *Life and Works of Pirî Reis*, Ankara.

Kahle, Paul,

1926: *Piri Re'is, Bahrîje, Das türkische Segelhandbuch für das Mittelländische Meer von Jahre 1521*, Band I (Text) 1, Band II (Übersetzung) 1, Berlin, Leipzig.

1929: Piri Re'îs und seine Bahrîje, *Beiträge zur historischen Geographie, Kulturgeographie, Ethonographie und Kartographie, vornehmlich des Orients*, Leipzig, Wien, pp. 60—76.

Kissling, Hans Joachim,

1973: Zur Beschreibung des Rhône-Deltas in der Bahrîye des Pîrî-Re'îs, *İslam Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, 5, pp. 279—287.

Kurdoğlu, F. & Alpagot, H.,

1935: (ed.) Pirî Reis, *Kitabı Bahriye*, İstanbul.

Mantran, Robert,

1985: La Description des Côtes méditerranéennes de la France dans le Kitâb-i Bahriye de Pîrî Reis, *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée*, N°39, pp. 69—78.

Mitsuhashi, Fujio,

1976: A Study of the "Çin Deniz" in the "Kitab-ı Bahriye", compiled by Pîrî Reis, *İsmail Hakkı Uzunçarşılı'ya Armağan*, Ankara.

Ökte, Ertuğrul Zekâi,

1989: (ed.) Piri Reis, *Kitab-ı Bahriye*, Vols. 1, 2, Ankara.

Semenoğlu, Yavuz,

1974: (trans.) Pîrî Reis, *Kitab'ı Bahriyye, Denizcilik Kitabı*, 2vols..

Soucek, Svat,

1971: The 'Ali Macar Reis Atlas' and the Deniz Kitabi: their Place in the Genre of Portolan Charts and Atlases, *Imago Mundi*, 25, pp. 17—27.

1973a: A propos du Livre d'Instructions nautiques de Pîrî Re'îs, *Revue des Études Islamiques*, 41, pp. 241—255.

1973b: Tunisia in the *Kitab-i Bahriye* by Piri Reis, *Archivum Ottomanicum*, 5, pp. 129—296.

Yurdaydın, H. G.,

1952: Kitâb-i Bahriyye'nin Telifi Meselesi, *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi*, 10, pp. 143—146.

〔附記〕

一九八九年九月二〇日、一〇月一日両日に行なわれた「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」B班・T班合同研究會」において、本稿に関連する内容を口頭発表した（『イスラームの都市性研究報告』研究會報告編・第一五號、一九九〇年一月

を參照)。發表の席上出席者から多くの有益な批判と助言を頂き、本稿を草するに當って參考にさせて頂いた點も少なくない。本稿の文中ではいちいちお斷りしなかったが、ここに記して謝意を表する。

officer under Manṣūr. They were fairly autonomous and they maintained the public peace within the madīna. The Mirdāsids then chose the qal'a as their residence. Their successors, the 'Uqaylids, the Saljūqids, the Zangids and the Ayyūbids, also used it as their palace.

THE CHARACTER OF *KITĀB-I BAḤRĪYA*
—on the Text of the Manuscript of Ayasofya 2612—

SHINTANI Hideharu

The construction and the contents of the text of Ayasofya 2612 manuscript of *Kitāb-i Baḥrīya* (a manuscript of the text of the year 932, owned by Süleymaniye Kütüphanesi in Istanbul) were examined as fundamental work to consider the relation between the Ottoman Empire and Mediterranean World. As a result, the following points became obvious.

(1) The current of narration of the text has regularity, but in the area of Aegean Sea and East Ionian Sea and that of West Mediterranean Sea (especially the part of the north coast of West Mediterranean Sea) the regularity is broken obviously.

(2) As for the quantity of description of the text per area, the weight of the area of Aegean Sea and East Ionian Sea and that of Adriatic Sea and West Ionian Sea are large.

(3) As for the quantity of description of the text per chapter, that of the area of West Mediterranean Sea especially the part of the north coast is peculiarly large.

(4) The historical information of the text is relatively much in the area of West Mediterranean Sea and that along the north Africa. The reason is that descriptions over acts like piracy or conquest of Pīrī Ra'īs are many.

(5) The north coast of West Mediterranean Sea has a peculiar character

in every point of the current of narration, the relative largeness of the number of pages and that of lines per chapter, and the quality and contents of the historical information.

(6) The contemporary information about Mediterranean Sea was incorporated into Kitāb-i Baḥrīya, so the Ottoman Empire was able to make use of such information.

THE POWER STRUCTURE OF THE TAEWŎNGUN 大院君 POLITICAL POWER
—the Analysis about the Construction of the Upper Political Power—

KASUYA Kenichi

The purpose of this paper is to examine several questions about the power structure of the Taewŏngun 大院君 political power (1863. 12–1873. 11) in Korea.

The author carried out a research into the Yangban 兩班 bureaucracy who had held important offices in the central government in the period of his political power, and analyzed that they had belonged to which of the Sasaek Tangp'a (Four Sects) and they had come under the rule of which clan. The important offices into which the author carried out a research are the Ŭiijŏng 議政, the P'ansŏ 判書, the Ch'amp'an 參判, the Kyujang-gak 奎章閣, and so on.

As a result of the analysis, the author made the following three points clean. 1) The Namin 南人 and the Pugin 北人 out of the Sasaek Tangp'a were little appointed to the important offices from the end of the Namin political power (1694) to the start of the Taewŏngun political power. But, in the period of his power, they were frequently appointed to almost all important offices. 2) Out of those who hold offices as the Ŭijŏng, the P'ansŏ, the total number of the Chŏnju-Yi Clan 全州李氏 belonged to each sects surpassed the number of the Andong-Kim Clan 安東金氏 from